

異世界転生を間違っ
て『よう実』世界へ

仁611

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

公安の諜報員が異世界転生…

転生チート能力を貰ったけど、転生先は魔法が無い『よう実』の世界だった。

『よう実』世界にファンタジー要素を取り込んだ変わった二次創作物です。

文才が無いのはご了承下さい…

目次

ファンタジースキル満載で『よう実』へ

1

東堂の出現で起きる世界の変化 |

16

神室 真澄は実は超絶乙女 |

31

フアンタジースキル満載で『よう実』へ

俺は今信じられないモノを見ている…

無神論者で公安の諜報員だった俺が、まさか神を自称するモノを目の当たりにするな
ど思ってもみなかった。

ココに至る最後の光景は正に地獄絵図だった…

偶然にも、俺が寄ったシヨツピングモールでテロを自称する宗教団体に遭遇してしま
い、13人の容疑者は無差別にマシンガンを乱射したのだ。

モールは混乱し、我先にと客は逃げ惑い背中を打たれて行く中で、俺が見たのは必死
に我が子を守る母親だった…

気が付くと体が動いており、その親子を逃す為に容疑者に素手で攻撃を仕掛けた。当
然何発かは身体に命中するが、その程度今までも経験した事があったので、怯まずに相
手から武器を奪い13人の容疑者を無力化させた…

だが…

容疑者以外に1人だけ民間人に協力者が居た様で、ハンドガンを親子に向け発砲しよ
うとする…

親子の壁になる様に飛び出しながら、俺はやむをえず容疑者の眉間を撃ち抜いた。
だが…

容疑者は眉間を撃ち抜く前に発砲しており、俺は親子の盾となつてどうやら肺に命中してしまつたらしく、自分の血液に溺れる様に死んだ筈だった。

気が付くとそこには、祖父が飼っていた柴犬のココが居た…

7年前に死んだ筈のココ…

(何故ココが) そう思つて居ると、ココだと思われるそれは俺に話し掛けてきたのだ。

『はじめまして、東堂^{トウドウ}蓮^{レン}。私はあなた方の理りで言う神です』

「…死んだ自覚は有るが、何故ココの姿なんだ」

『我々の姿はあなた方には理解が出来ない為、貴方自身が受け入れ易い姿にしているだけです。貴方は幼き命とその母を救つたのですが、その幼い女の子は貴方が幸せになる様に願ひ、その母親は貴方に何にも代え難い感謝をしていました…そこで貴方には来世への切符として異世界へと転生する機会を差し上げます』

「異世界ですか…」

『ええ。貴方が行った行動で直接的には親子を救い、間接的に24名の人々を救ったのですから、貴方への心ばかりの手向けです。転生先は9割以上が、あなた方が言うフアンタジーの世界です…如何されますか東堂 蓮』

「…俺と言う人格が残るなら、転生を選ばせてもらいます」

「では、貴方が救った26名に見合う特典を差し上げます。少女の願いである幸せ…貴方がより多くを得られる【生粋の天才】母親が感謝した代え難い思い【世界一の容姿】残り24名の感謝はスキルとしてこちらから選んで下さい」

【剣術・槍術・弓術・盾術・斧術・武術…】

俺は神が見せる500を超えるスキルの中から、24のスキルを1時間以上掛けて選んだのだが、かなりぶっ飛んだスペックなのではと内心思っただけだ…

《ステータス》

東堂 蓮

【恩恵】

生粋の天才

世界一の容姿

【スキル】

剣術

武術

第六感

身体能力向上

アイテムボックス

隠密

異世界言語マスター

スキル習得率アップ

マップ

絶対記憶

思考速度向上

反射神経向上

動体視力向上

読唇術

交渉術

ポーカーフェイス

精神力向上

鑑定眼

気配感知

運氣上昇

体力回復向上

魔術

魔力操作向上

魔力回復向上

スキルを選び終わると転生先の選出のみになり、神が1000本以上入ってるおみくじを俺に引くように言ってきた：

俺は素直におみくじを引くと、文字が浮かび上がる：

『…【ようこそ実力至上主義の教室へ】ですか、ファンタジーとは言えないですがこれも運命でしょう』

「そこがどんな世界か俺は分かりませんが、ありがとうございます」

『貴方の来世が幸せであります様に』

光に包まれ浮遊感に襲われると急激な眠気に見舞われた。夢を見ていた様に今までずつと生きてきた15年が本場で、前世が夢だったのではと言う錯覚に陥るが明確に今この瞬間転生したのを悟った：

い…
15年の記憶が存在しているし、今世の家族の記憶も存在する違和感はさほど感じ無

転生したのはバスの中で、運転手の真後ろに座っていることに気が付いて、今の状況を記憶から呼び覚ましてみる。

今日は東京都高度育成高等学校の入学式で、今後在学中は敷地外に部の大会・資格試験・学校行事以外基本的に外出禁止らしい。高度育成高等学校は外出以外にも、本校関係者以外は緊急時以外連絡を禁じられている様だ：

今の置かれてる状況も大事だが、俺はある事に気が付き窓ガラスに映る俺自身を確認した…

【世界一の容姿】がどんな見た目なのか…

見た目は中性的で髪は白兔の様な白さ、瞳はダークグレーで髪の長さは肩に掛かるぐらいの長さらしい。筋肉は無駄が無く洗練された見た目と言える程に美少年だな…

1人の世界に入っていると、どうやら目的地に着いた見たいだから急ぎ俺も下車する事に。

学園の門は大きな大理石で出来ており、側には守衛らしき人が待機する待機室が存在する上、周囲には2メートル程の塀があり侵入出来ない様に有刺鉄線まで取り付けられている…

元公安の諜報員としては領事館を連想させられる程の嚴重さだな…

集合時間よりかなり早い為か新入生の姿は殆ど無く、校舎に向かう道すがらでは誰一人出会う事無くクラス別けの掲示板に辿り着いてしまった。

(うくん…あつた…Dクラスか…それにしても監視カメラの数が多いな……ただ…路地とか必要そうな場所が映らない設置の仕方に違和感がすごいな)

どうせだから俺は自分の能力を試そうと路地へと向かう事にした。

気になる能力はマップ・アイテムボックス・鑑定眼・魔術だ……ここが異世界とは言え、ファンタジー要素の強いこれらのスキルが本当に使えるのだろうか。

試しに鞆をアイテムボックスにしまうイメージをしてみる……

(はっ!? 鞆が消えて脳内に収納してある内容がわかる…みつミステリーだな…次はマツプ……うおっ!? 情報過多だな…)

俺がマツプをイメージしたら、半径300メートルの配管図やカメラ位置に電気配線などまで分かる見たいだ。人物の名前まで表示されてるからストーリーカーし放題だと思ってしまった…

(一先ず次だよな…鑑定眼)

胸ポケットに差しているボールペンを取って鑑定を試みる…

(凄い…値段・メーカー・所有者・材質・製造年月日まで分かる。恐ろしいな神様の力は…最後の魔術が1番問題なんだよなあ)

魔術がどんなものかは脳が理解しているが、イメージした通りの現象を魔術で作る様なモノらしい……化学文明の現代人からするとイメージは簡単だが、魔力で起こす現象が環境で変化したりしないだろうかが凄く心配だな。

(イメージは…空気中の水蒸気を圧縮して液体に……凄い!? 出来た)

実際にゴルフボールサイズの水が宙に浮いているが、これは基本使わない様にしないと誰かに見られたらまずいと思いい封印する事に…

その後は情報収集の為に敷地を散策して見たが、60万平米（東京ドーム約13個分）の全ては到底見て回る事が出来なかった。見て回った結果は、無料の商品がコンビニ・スーパー・自販機・食堂と言う感じに存在しており、毎月お金が無くとも飢えてしまう事がない様にされている様だな：

時間的には少し早いですがDクラスへと向かうと、割と廊下には新入生が居るが……俺の容姿が原因で性別関係なく二度見される。

教室の扉は開いたままなので何も考えず入る事に：

俺に気付いたクラスメイトは一斉に俺を見てくるが、気にする事なく自分の席を見つけて座る。席は最後尾のど真ん中だからなのか容姿が原因かは分からないが凄い注目を集めてるな：

諜報員としてのサガなのか、溶け込めない容姿が少し嫌になる。

誰も声は掛けて来ないが、人脈は必要だと思い左隣に座る黒髪ロングの美少女に声を掛けてみる事にした。本を読んでいる彼女に気を使いながら、何処と無くツンケンして
そんな彼女に話し掛けた：

「本を読んでいるところ悪いが挨拶だけさせて貰って良いかな。俺の名前は東堂 蓮……これから隣同士だから名前だけでも聞いて良いか？」

彼女は本にしおりを挟むと、長い髪を耳に掛けながらこちらに顔を向ける。凜とした顔立ちに化粧つ気が無い何処か冷たさを感じる眼差しで俺を見てくる。

「私に言ったのかしら……正直言うとき余り関わり合いが欲しいとは思って居ないのだけれど」

「すまないな。楽しく話したいとかでは無いが、君にクラスメイトとして要件があった場合に備えて、名前だけは教えて貰えないか？」

「堀北鈴音よ……」

「ありがとう。因みに聞きたいのだが、隣の彼と先程まで話して居たところを見ると前からの知り合いなのか？」

「いいえ。綾小路君とは偶然バスの反対側に座っていただけの関係だわ……」

彼女は若干嫌そうに答えると、偶然にも綾小路と呼ばれるクラスメイトと目が合うと、彼は苦笑いを浮かべて居るのだが目は表情とは違い観察する様な冷徹な印象を受けた。

「すまなかつたな読書の邪魔をして……」

「……」

彼女は無言で読書を再開し始めたのと同時に、教壇側の扉からスーツ姿の女教師が入って来た。

「入学おめでとう諸君。今日から君達の担任になる茶柱佐枝だ…本校は進級時のクラス替えは無いので、君達とは3年間共にやっけて行く事になる……」

その後茶柱先生は、この学校の大まかな決まりを話して行き途中で生徒1人に1台の端末を配って行く：

その後も説明が進み、途中で生徒が騒つく瞬間もあったが俺はそれらの内容を1人で考えて居た。

- ・ 全寮制で外部との接触禁止
- ・ 在学中は本校敷地外への外出は特例以外禁止
- ・ 現金の代わりに電子マネー（プライベートポイント【pt】）
- ・ ptでは本校のあらゆるものが買える
- ・ 1pt＝1円の価値
- ・ 入学時点の生徒の価値として初期残高100,000pt
- ・ 実力で生徒を図る

・ p t は譲る事も可能

・ p t は毎月1日に自動振込される

・ 本校はSシステムを中心に考えられて居る

殆どのクラスメイトは、ポイントの多さに浮き足立って茶柱先生の話を真面目に聞いて居ない雰囲気で、茶柱先生が質問が無いかを皆に尋ねて居る…

「先生…質問を宜しいでしょうか？」

「東堂か。答えられる範囲で答えよう」

（答えられる範囲で…：恐らく先生達にはマニュアルが存在して規制が掛けられて居るのだろう）

「ありがとうございます。先生は1日にポイントが振り込まれると仰いましたが、来月のポイントは幾らになるかを伺っても？」

「それは私には分からん…：他には良いか？」

（間違いなく p t は変動する事を意味するな…：この学校は正直異常だ）

「ではもう一つ宜しいでしょうか？」

「ああ…」

「実力で評価すると仰って居ましたが、日本社会は基本的には連帯責任と言う言葉があ

ります…評価はクラス単位でしょうか？」

「……その時その時で変わって来る……他は良いか？……無いようだからここまでだ。入学式の放送があるまでは好きにしろ」

（時々で変わると言う事は、来月のPtはクラス単位の可能性も大きいだろうな…ただ個人で評価される内容も存在すると考えて動くかな）

クラスメイト達は、俺のした質問が理解出来ない者や自身で内容を吟味している者も居た。そんな中1人の男子生徒が立ち上がると、皆に良く聞こえる声で話し始めた。

「みんな色々聞き過ぎて混乱してると思うけど、これから3年間一緒のクラスになるんだから自己紹介をしないかい？僕達は互いの名前すら知らないんだからさ…」

周囲には歓迎5割・困惑3割・迷惑2割と言った雰囲気だったので、俺は手を挙げて彼の提案に異を唱える事にした。

「ちよつと良いか？」

「えつと…東堂君で良かったかな？」

「ああ。東堂 蓮だ…君の提案は勇気が要る凄い行いだと思う…半数は歓迎すると思うけど、君の提案は少数を切り捨てる提案になってしまうとと思う。ここで仮に自主的にと言つて半数が賛成したら、目立つのが苦手だったりあがり症だったりする人は同調圧力

で強制的に自己紹介をする事になるんじゃないか？」

「…そうだね。個々でする事にするよ…言い難い意見を言ってくれてありがとう。一応僕だけ自己紹介しておくよ…平田洋介、基本的に運動が好きでサッカー部に入ろうと思ってるよ。これから宜しく」

「折角皆を代表して言ってくれたのに悪いな平田…あと先程茶柱先生に質問した内容的に、今後この学校での生活態度なんかが来月のポイントに影響する可能性が高いから気を付けた方がよい…」

「そうだね!!? さっきの内容だと授業態度に成績や生活態度が実力の査定に入りそうだね。みんなも協力してくれないかな?」

「私も協力するよ」

「「私も」」

教室は個々で自己紹介を始め、一部では俺の発言で安心した顔をしている者も居る…俺はそんな部類だろう右隣の女子生徒に呟くように一言伝えた。

「これで君も安心出来たか?」

彼女はハッと俯く顔をこちらに向けると小さな声で「ありがとうございます」と言っ
て居た…

入学式も滞りなく済むと昼前には解散する事になり、俺は自分の中にある仮説から上級生の昼食を調査する事にした。マップで2・3年の行動を表示して見たが、上級生達のDクラスは寮8割と学食2割・Cクラスは寮5割に学食2割と飲食店3割・BとAクラスは飲食店でのご飯が主で構成されている…

(間違いないポイントはクラス単位で変動するな…その上クラスの優劣がAは優秀でDが底辺だな…)

もう一つ俺が仮説として、かなりの高確率で当たっているであろう事を実行する為にとある部屋に向かっている。

コンコンコン…

「失礼します」

東堂の出現で起きる世界の変化

「失礼します」

「見ない顔だな？」

「I—Dの東堂 蓮です…先輩達とカードで賭けをしに来ました」

俺が訪れたのは遊戯部の部室で、他にも賭けをしている部活も多いと思うけれど、ひと勝負の時間やマップに表示される部員数が多かったのが理由だ…

「ほお…入学初日に賭けをしにくるとは驚きだな。因みに今やつてるカードのグループはポーカーとブラックジャックだがどっちが良い？」

「ではポーカーでお願いします」

「分かった。ならここに座れば良い…レートは最低5,000ptで、今日支給されたばつかだろからMAX100,000ptで行くが良いか？」

「是非お願いします」

3人の先輩達とポーカーを始めたのだが、俺には運気上昇・第六感スキルが存在する上に、鑑定眼で相手の手札が丸わかりと言うインチキまで存在している…

当然ではあるが、賭けとして勝率は8割を超えらると言う事もあり、第1グループ・第2グループ・第3グループとポーカーを行なったが、最初のグループのMAXレートが100,000pt、第2は200,000ptに上がり第3は上限無しと言う状態だった：

第1グループ	
1. レイズ	100,000 ○ 獲得125,000pt
2. コール	55,000 ○ 獲得170,000pt
3. ドロップ	5,000 ● 損失5,000pt
4. レイズ	100,000 ○ 獲得150,000pt
5. ドロップ	5,000 ● 損失5,000pt
6. コール	100,000 ○ 獲得170,000pt
7. コール	50,000 ○ 獲得100,000pt
8. コール	100,000 ○ 獲得205,000pt
9. ドロップ	5,000 ● 損失5,000pt
プラス	955,000pt
第2グループ	

残高	獲得	プラス	7. レイズ	6. コール	5. ドロップ	4. コール	3. レイズ	2. ドロップ	1. コール	第3グループ	プラス	5. レイズ	4. コール	3. コール	2. レイズ	1. ドロップ
3,090,000 pt	2,990,000 pt	1,380,000 pt	400,000	200,000	5,000	170,000	300,000	5,000	150,000		655,000 pt	100,000	150,000	50,000	200,000	5,000
			○	○	●	○	○	●	●			○	○	●	○	●
			獲得	獲得	損失	獲得	獲得	損失	損失			獲得	獲得	損失	獲得	損失
			505,000 pt	340,000 pt	5,000 pt	245,000 pt	450,000 pt	5,000 pt	150,000 pt			70,000 pt	415,000 pt	50,000 pt	225,000 pt	5,000 pt

遊戯部の3分の1から搾り取った俺は、次回来るなら別メンバーでカード以外を使用と誘われた為、遊戯部の部長さんと連絡先を交換してから俺は帰路に着いた…

ポーカールのひと勝負が非常に早い為、まだあれから1時間半しか経って居ない事に気が付いた。遅めの昼食は面倒だからと学食に向かった…

既に1時を回っていた為か、生徒数はかなり少なくなつて来て居る。食券を販売機で購入しようと思っていると、俺の前のお団子頭の女生徒が荷物から支払いに使う端末を探している様だ…

「どうかしましたか?」

「あつごめんなさい。端末を生徒会室に忘れたみたいです…」

「何を注文されるんですか?」

「えっ? 日替わり定食です…」

ピッ

俺はお団子頭の女生徒が注文予定の食券を買うと、彼女に差し出しながら自分のメニューを考えていると、彼女は目を見開き動揺している様だった…

「どうぞ…俺は…天井にしようかな」

「えっ!??でも…」

「もう買っちゃいましたから気にしないで下さい」

「では後でお返しします。ありがとうございます…私は3—Aの橘 茜と申します。名前を伺っても？」

「分かりました。俺は1—Dの東堂 蓮です…橘先輩は生徒会役員ですか？」

俺たちは料理を待ちながらたわい無い話しに花を咲かせて居ると、入学式で見かけた生徒会長が後ろから話し掛けて来た。

「橘…端末を生徒会室に忘れて居たぞ」

「すみません会長」

「構わんが気を付けろ…それにしても見かけない生徒だが後輩か？」

「会長!? 彼は1—Dの生徒で「東堂 蓮です」…先程困っていた所を彼が助けてくれたんです」

「そうか…1年生がこの様な時間に食堂に居るとは…東堂と言ったか、お前はこの学校をどう見る…」

（この人…会長になるべくしてなったって感じだな）

「……自治国家ですね」

「ふっ…面白い。橘…確か会計の席が空席だったな？」

「かつ会長!? 確かに空席ですが…」

「何だ？不服か？」

「いついえ…会長がそうお決めになられるのでしたら…」

「…どうだ…東堂。生徒会に入らないか？」

「確かにそれも面白いかも知れませんが…ただし条件があります。基本は在宅ワークで週1は生徒会室勤務と言う事でお願います…当然忙しい時期などは多く生徒会に顔を出しますが…それで宜しければ生徒会に入らせて頂きます」

俺の発言に顔色一つ変えない生徒会長とは正反対で、橘先輩は目を見開き俺の発言に驚愕している様子だった…

「ああ、それで構わん。明日には担任に生徒会役員の書類を渡しておく…放課後には担任に提出しておいてくれ」

「分かりました。では今後とも宜しくお願いします堀北会長」

「ああ…私はまだやる事があるのでこれで失礼する」

その後は会長は立ち去り、橘先輩と一緒に昼食を取る事にした。生徒会での主な役割や会計の負担する内容なども説明して貰ったが、生徒会の権力がいかに大きい物かが分かってしまう程、学校の根幹に触れる権利があるようだった…

・生徒会には特別報酬が存在するが他言は禁止

・生徒会は主に学校行事以外に特別試験の公平性の監視、校則違反やルール違反のペナルティーの内容決めなど：

・会計は生徒間と教師からのポイント譲渡に不正が無いかを確認する業務や、年間の特別試験でのボーナスポイントの妥当な金額設定も行う：

今後も多く情報が、生徒会役員には優先的に入って来る事を考えると、今日会長と出会った事も運氣上昇の効果の可能性は充分あり得るだろうな：

橘先輩とは連絡先を交換してその場で解散した：俺はその足で今後に備えて必要そうな物を買う物に出掛けた。電気屋とホームセンターで諜報員時代は当然持っていた盗聴器・小型カメラ・ボイスレコーダー・ハイスペックPC・ピッキングキット・変装セットなどを用意していった：

当然だが特殊な物は自作で工作するしか無いが、俺は自分のスキルである事が出来る事に気が付いた。購入した物は自室に運び込んでからアイテムボックスに殆どを仕舞い込み、気付いた事を実行に移して見ることにした：

【隠密】 【アイテムボックス】 【マップ】 【身体能力向上】 【魔術】

これらのスキルを使って俺は学外に容易く出ると、学校から割と近いある埠頭の倉庫にやって来た：

そこには某国系マフィアの倉庫があり、20人以上の警備が存在する様だが、魔術にマップがあれば警備はあつて無いような物だ：

倉庫がある埠頭に向かうのも魔術で海中を歩行して向かい、マップで警備を全員把握して魔術で眠らせた。そこに有った銃火器や諜報様に使えそうな機材はアイテムボックスに入れ、金庫の中身も全て収納させてから俺はその場を立ち去った：

彼らが持っていた集音器・変声機・高性能ドローン・自白剤・暗視スコープ・高性能双眼鏡・セキュリティハック機材一式など、マフィアが持っているにはおかしな物が多い。

もしかすると諜報機関のアジトとして、カモフラージュでマフィアのように振る舞っていたのか？だがマップスキルでマフィアと出ていたので間違いは無いと思うが。

ひとまずこの件はこれで終わりにして、本当の目的であるマフィアから貰ったお金で変装用の服（女物）と化粧品を購入して、学校へと向かう。寮に戻る際は、行きと同じ様に【隠密】【魔術】を使って監視カメラに映らない様に徹底して帰宅する。

翌朝教室に着くと、半数以上のクラスメイトは既に教室にいる様なのだが、皆は昨日話をした茶柱先生の言った事を相談して居る。自分の席に向かっていると、昨日自己紹介した平田が俺に話し掛けて来た

「おはよう東堂君。昨日の件で少し君の意見が聞きたいんだけど良いかな？」
「構わない。何が聞きたい？」

「東堂君が考えてるポイントの増減される行為を聞かせて欲しい」

「ああ分かった。まず難しく考えずに学生の本分を全うする事、授業の私語に端末操作など小中学校で言われて来た駄目だとされる行為は減額対象だろうな。もう一点言うならば、私生活での言動も当然減額対象に含まれるだろうと考えてる」

「そっか。ありがとう、参考にさせて貰うよ」
「気にするな」

俺は平田と話し終わると自分の席に着く、堀北は相変わらず本を読んで誰とも会話をしていない様で、どこか自分の殻に籠っている様にさえ見えてしまう。

俺自身も端末操作をしながら周囲のクラスメイトを観察して行くが、2日目ではあるが既に一部でグループが出来ており、平田グループ（平田・軽井沢・松下・佐藤・篠原）
榎田グループ（榎田・井の頭・王）
池グループ（池・山内・須藤・外村）
と言った感じ

に形成されて居る。

俺の右側に目をやると、目線を誰にも合わない様に机に向ける佐倉が目に入った。俺はマップで一方的に名前を知って居るが、本人は俺の名前を覚えて居るかは定かでない、それに佐倉の場合は人に極端に臆病な様だ…

「おはよう。佐倉」

「えっ!!?…おっお…「ゆっくりで良いからな」おっおはよう。東堂君」

「急に話し掛けた所為でビックリさせて悪いな、佐倉が会話が苦手そうだと分かっていたが、折角だからせめて少しは会話出来るようになりたかったからな」

「うっうん。東堂君の目は優しいですから、ほつ他の人よりは平気です」

「そうか?俺自身は意識した事無いから分からないが、そう言われて悪い気はしないな。佐倉は昨日は直ぐ寮に帰ったのか?」

「うっうん。はつ初めての場所だから不安で、きよ今日必要な物を買に行く予定です」
「良かったら一緒に回るか?少しでも知ってる相手が居た方が不安は和らぐだろうからな」

「え!!?えつと…よつよろしくお願いします」

「ああ、こちらこそ。一応連絡先を覚えておくが、不安なら俺には教えなくてもいいから

な」

「うっうん。大丈夫です、とっ東堂君は悪い人じゃないって思います」

佐倉が先程より声に力を入れて発した事に驚いて居ると、茶柱先生が教室に入ってきたので会話を終了する。最後尾の座席の為、クラスメイトが1名まだ登校してないのが直ぐに分かったが、その場所は須藤の席だと分かる就容易に遅刻だと想像が出来た。

結局須藤が登校して来たのは1限の中頃で、SHRの後に平田が皆にポイント増減の原因になり得る行為を説明していた為、クラスメイト達は須藤に対して冷ややかな目で見っていた。

授業後に平田が須藤にも先刻話した内容を伝えたが「俺の行動に指図すんじゃない」との事で、一切取り合わずクラスメイトから高円寺以上に嫌われている。

放課後になり俺は約束通り佐倉の買い物に付き合う。

「じゃあ何処から行く?」

「じゃじゃあ、食器とか洗剤が売ってる場所をお願いします」

「了解。佐倉は何か趣味とかあるのか?」

「しゅ趣味は…しゃ写真です。東堂君は?」

「写真か、良い趣味だな。俺は余り褒められない趣味だが人の思考を読んだりする事か

な。相手のクセや言動、趣味嗜好で相手の考えを勝手に妄想するのが趣味って言うかなり変わった人間だ。佐倉の思考もある程度なら当てられるぞ」

「えっ!?」

「まず佐倉の人と接する事への苦手意識は、元々内向的な面と自分の容姿が原因だと予測してる「えっ」佐倉の眼鏡はレンズに度が入っていない事から伊達眼鏡だと分かるし、普段から顔を見られない様に俯きがちな事が多い：後は素顔が可愛いからな」

俺の言葉を聞くとゆでダコのように真っ赤になり「かつ可愛い」と言う言葉を連呼している。

「ただ素顔が可愛いだけでそこまでならないと俺は予想してた、そこで先程の趣味を聞いた際に、佐倉は何処か隠したいと言う雰囲気があった事から、恐らく写真がキーワードになると読んでるよ」

「そっその…：私は」

「心配しなくて良い。佐倉が何かを隠してたとしてそれは人としてとても普通の事だからな。もし佐倉が困ったら言ってくれたら助けてあげるからな?この学校では予測出来ない事が起きる可能性は多いにあるんだからな」

「あつありがとう…：ございます／＼」

佐倉と生活必需品を買った後、家電量販店へと向かい一緒にカメラを見る事になっ

た。佐倉は極力ポイントを使わずにカメラが欲しい様なので、そこまで高性能なカメラでは無いが20,000pt程のデジカメを購入することにした。

会計する為に彼女とレジに行くと、量販店の店員は佐倉を舐める様に見える所為で、彼女はかなり萎縮してしまっている。俺は店員の余りにも従業員らしからぬ行動に不信感を抱き彼女に話し掛けた。

「君は先に店の前に行つてて」

「えっ!?!」

「ちよちよつと君!?!?まだ会計が終わつて無いんだから困るよ」

「俺が払うんで問題無いでしょう?」

「かつ買うのは彼女何だから駄目に決まつてる!?!?」

佐倉は今すぐその場を去りたい気持ちがあつたので、俺が彼女の背中を押すと走つてお店の外へ出て行つた。店員はイライラし出して俺に怒りを露わにして来た:俺が小型カメラで撮影していると知らずに。

「いついい加減にしてくれないかな君!ぼつ僕の仕事の邪魔をしないでくれないかな」

「仕事の邪魔?女子高生を舐める様に視姦して、購入する際に彼女の端末を覗き込みたかつただけだろ!?!?」

「なつ何言つてるんだ貴様は。ぼつ僕がそんな事するわけ無いじゃ無いか、何を証拠に

君はそんな事を言ってるんだ！」

「ここ見てください、小型カメラですよ。貴方が発言した事や行動は全て記録されてます……」

俺の言葉を聞いた店員は、無理矢理小型カメラを奪い取ろうとレジ向こうから乗り上げ気味に掴みかかって来た。俺が店員の腕を弾くと、逆上して側にあつた丸椅子を持ち上げ何を思ったのか殴りかかって来たのだ。

「……この……のおお糞がああ」

「見苦しいな」

俺はレジを乗り越えて来た店員と距離を詰めて、椅子で殴れない位置に迫ると脚を払いそのまま腕と首を極めて相手を絞め落とした。店員は白目を向いて気絶した様なので、俺はすぐさま茶柱先生へと対応の指示を仰いだ……

その後は結構大変だったが、茶柱先生も15分と言う速さで駆け付けてくれ、佐倉と一緒に事情を説明した上で動画の提出も済ませた。茶柱先生には「何事も無くて良かったが余り無茶をするな」と言われた後に「佐倉を良く守った」そう言われてついつい昔を思い出してしまう

佐倉と一緒に寮に帰っている間は殆ど無言だった為、別れ際に「佐倉が危険に会わなくて良かった」そう言うのと泣きながらありがとうと何度も言ってきた。

不安な気持ちで自分の部屋で一人きりはキツイと思い、部屋に着いたら直ぐに電話してくる様に言ってお互いの部屋へと帰った。

翌朝はスキルのお陰で寝不足にはなっていないが、佐倉が寝付いたのは午前3時過ぎだった。【体力回復向上】のお陰で睡眠が無くても数日行けるのではと思ってしまう程だった。それと電話する事で分かったが、佐倉は電話だと結構普通に話ができる様でかなりおしゃべりだとわかった。

佐倉 愛里

『雫』と言う源氏名でグラビアアイドルを中学2年からやっているらしく、今では某週刊雑誌などにも掲載されている若年層で人気急上昇中のタレントだ。本校在学中は活動を自粛することを『海外留学の為』としているらしい。

学力：B

知力：C+

判断：D

運動：E

協調：E

神室 真澄は実は超絶乙女

入学してまだ4日目の放課後、俺は特に用事も無いので帰りにコンビニに寄って夕飯を買って帰ろうとしていた。サイドテールの紫がかった髪色の女の子が不審な行動をしている事に気が付き、更にそれを少し離れた場所から新しいおもちゃを見つけた様な顔で見つめる杖をつく女の子も目に入った。

(このまま見て見ぬ振りには出来ないな)

俺は紫がかった髪の子の側まで歩みを進め、杖をつく女の子が彼女を見るには邪魔な立ち位置に立つと、無遠慮に彼女に声を掛けた。

「やめた方がいい。俺の後ろに居る彼女が君をおもちゃにしようとお観察してる様だよ。この学校は凄く特殊だから自分の行いが学校生活にどんな影響があるか分からない」

「ツ???——誰。あんた」

「I—Dの東堂 蓮だ。今なら君は何もしてないから大丈夫だ、杖をついた女の子は君をおもちゃにしたいんだろうから気を付けて」

俺がそう言って欲しい商品を手にとってレジに向かった。彼女も何も無かったかの様にレジに並んで来ると「助かったよ、ありがと」と小さな声で言って来た。

俺はつい姪っ子に対応する様に彼女の頭に手を乗せポンポンと叩き「どういたしまして」と笑顔で彼女の目線で答えた。彼女は口を半開きでフリーズしたと思ったら、みる顔が赤くなって行き耳まで真っ赤になってしまった。

俺はやってしまったと気付いた。元普通の30代↓今超絶美少年15歳だと言う事と、そんな奴が公共の場で不用意に頭を触りキラキラスマイルを振り撒いたのだ。

俺は原因を作った責務を果たすために、固まって俯く彼女の商品も一緒に会計してから彼女を連れてコンビニを後にした。

(マジでやってしまったな。前世でやったらセクハラで、今やったら少女漫画の顎クイ・壁ドンと同じ何だよな…)

あれから数分程、近くにあったベンチで彼女が落ち着くのを待っている。鞆を抱える様に抱きしめて未だに耳まで真っ赤な彼女、見た目も言動もツンツンしてるのに、異性への耐性が低過ぎて反応が可愛すぎる事に微笑ましくおもえてしまった。

「少しは落ち着いた？」

「ツッ？／＼だっ大丈夫」

「さつきはごめん。女の子の頭を気安く触る何て失礼だよな、それに結構同学年も居たから変に誤解を受けるかも知れない」

「きつ気にしないから良い。それにあんたは別に…」

「別に？」

「しつ下心から頭触った訳じゃ無いんでしょ／＼」

「そうだな。つい可愛いなって思ってしまったな」

「なっ／＼／＼」

その後は酷かった。俺のうっかり子供に大人が言う感覚で『可愛い』と言った事が原因で、異性耐性が紙装甲な彼女は抱えた状態から足まで抱えて俯き丸まってしまった。

直ぐに彼女が足を抱えた事で、下着が見えてしまう事に気が付き上着を彼女の膝に掛けて再起動を待つて居た。1時間はそのベンチにいただろうか、途中で綾小路が俺に奇異の目を向けてコンビニ入って行ったり、池と山内が殺意の籠った嫉妬の目でこちらを睨んで来た。

待つてる間は暇なので生徒会の資料をノートPCで作成して行き、時間は有効活用している。流石にこれ以上はまずいと思って、最終的には彼女の手を引き寮へと連れて帰った。

ここで問題が発生したのだが、俺は彼女の名前を知らない事だ。寮の部屋番号を聞いても俯いたまま、名前を聞いても俯いたままと言う無限ループ状態だ。

結果…

気が付くと俺は床で寝て居て、彼女はベットで眠っていると言うお持ち帰り状態が発生した。勿論彼女に何かしたなどと言う事は無いけれども、彼女に何て説明したら良いのだろうかと思つて居たら、彼女と目が合うと目を見開いて本気でテンパリ始めた。

「えっ!? えっ何処(どこ)??」

「悪いがあのまま放置できなくてな。勝手に端末を触つて名前を知る訳にも行かない上に、部屋番号も知らないから送り様が無かったから結果的に俺の部屋に居る。当然何もしてないから安心していい」

「えっと、ごめん私の所為で迷惑掛けて。それとありがと／＼」

「いいえ、どういたしまして。テーブルにタオル出してから顔でも洗つて来たら良いよ、俺は朝食作るけどトーストは大丈夫か?」

「えっ!? うん。大丈夫」

俺達は、登校するには少し早いけれど彼女はシャワーを浴びてない事を考え早めに朝食を食べた。